男の急所を持つ剣道部員が女子薙刀部員と戦ってはいけない理由
『男子剣道部対女子薙刀部』
男殺しの必殺「護風」で簡単に男子を倒す女子たち。
短小主将の過酷な戦い
玉子王子　著

１章　男殺しの必殺技、「護風」

小さな手……

近藤壮史はその日の妹の手の小ささをよく覚えていた。

見下ろしてくる母親の顔は覚えていない。

親戚の家。

父が亡くなり、預けられた家。

そこの玄関で、妹と並んでいる記憶。

前に立つ母親が「すぐ戻ってくるから」と約束したのはちょうど壮史の誕生日だった。

それから十年近く母親とは音信不通だった。

妹の史香はまだ小さかったが、その日の痛みを周りにわからせまいと無理をして明るくふるまっていると壮史は内心痛々しく思ってきた。

今、同じ不動学園の一年生だ。

壮史は三年。

壮史は剣道部で、史香は薙刀部。それぞれ男子・女子をつける場合もあるが、男子薙刀部はないし、女子剣道部もないのであまり意味がない気がする。

学園はもともとそれなりの人数がいたが、少子化とともに生徒数は減っていき、そろそろ部の統廃合も始まっていた。

剣道部は大丈夫だ、と顧問の女教師が言っていたが、壮史は信じていなかった。

――女が約束なんて守るかよ。

妹など少数の例外以外、壮史は女というものは信じられないと思っていた。

それは幼い日の誕生日、母親がした約束が守られなかったことによるゆがんだ思い込みだが、本人にとっては世界の真実である。

剣道部というのは全く花形ではない、サッカーやバスケット・テニスなどが「かっこいい」部活の最たるもので同じ活躍するのでもそれらと剣道部では全く違う。

それでも、主将としてそれなりに活躍していて顔もいいならある程度はモテる。

モテるはずだが、女を根本的に信じない壮史は彼女は欲しいものの、あまり熱心に近づく気にもなれないという半端な立ち位置である。

当然、彼女などできるわけもない。

そういうところがストイックに見え、剣道部と薙刀部の顧問、両方とも三十少しの熟女であるが、彼女らに色目を使われることもある。

が、年上は母親を連想するので全く興味はない。

二人とも爆乳といっていい、悪くない女。

周りの学生たちといい、爆乳熟女といい、頑張ればいい目を見れるポジションにいるというのに壮史はそれをまるで生かせていない。まったく宝の持ち腐れ、もったいない青春をおくっているといえた。

武道場は一つしかない。

使っているのが剣道部と薙刀部だけなのがまだ救いだ。

今日は剣道部が先に使う日だった。

練習を終えて、便所に入る。

小学生ではないので、大便でもしたいときにできる。

腹具合が悪いでもないが、少し時間がかかる。

出ると、すでに剣道部の男子は姿を消し、薙刀部の女子たちに入れ替わっていた。

「あるある！」

女子の声。隣の便所から聞こえてきていた。

「他所だと、男子部員もいるのよね。それで、「男子のほうが強い」とか思ってんの。態度でわかんだけどさあ！」

「あるよねえ！　やだやだ……ねえ、練習相手がそういう奴だってわかってたら、どうする？」

チラ、とトイレの中を覗く。

中といっても個室と手洗い場が見えるだけだ。

少女らが並んで手を洗っている。

話に夢中で、壮史にはまったく気づいていない。

部員も顧問も女だけの薙刀部である、剣道部員も全員出て行ったと思っているからには、女だけの本音トークになるのも当然といえる。

少女らが着ているのは巫女服のようだが、薙刀部や剣道部で使われている道着である。

「どうするって……そりゃ決まってるよね？」

「だよね！　護風よ護風」

　護風。

　壮史には聞きなれない言葉だった。

　剣道にはない。

「何ですか？」

「あ、そういえばあんた入ったばっかりだったね。護風っていうのは……」

　ニヤ、と頬を緩める先輩の少女。三年もの間、交代で武道場を使っていれば当然、壮史は彼女の名前も知っている。

　――芹沢……

　壮史の中では、長い黒髪の美少女、おしとやかな大和なでしこというイメージだ。

　それが、今まで見たこともない、いやらしい感じの笑みを浮かべる。

　周りを見るが、便所の外にまでは気が回らない。

「護風っていうのはね、こう……下から跳ね上げる感じで」

「そうそう、跳ね上げて……うふふ、わかるわよね？」

　目くばせしあう先輩二人。後輩がきょとんとする。

「え、それがなんなんですか？」

「あら……いやいや、確かに私らに取っちゃよっぽど面撃たれたほうが衝撃来るけど……でも相手は……ねえ平山ちゃん」

「そうそう……相手はなんて言っても……男の子ですから。オトコノコ」

顔を見合わせる三年生二人。にんまりと笑う。

そして、芹沢が突如股間を抑えて飛び上がる。

「おごおおっ！　ってなもんよ」

「芹沢ちゃんうまい！　さっすが**潰した玉は星の数！**」

「ちょっと！　星の数ってわけないでしょ！　一人二個しかないのよ？　せいぜい**三〇〇個ぐらい**ねー再生できるから、生意気な野郎は**二〇個ぐらいやっちゃってるかも**だから、一五〇人って話じゃないよ？　そこまではさすがにねえ、女の子として」

「男殺しよねえ」

「平山ちゃんだって護風でキャン玉跳ね上げてさあ、「はぐうううう！」とか言って股間押さえて倒れた奴をさ、心配したふりして駆け寄って、事故装って踏みつけるじゃん、相手の手の上から**ぐりぐり玉踏み潰してる**の見たの、一回や二回じゃないよ？」

「治るからセーフ、治るからセーフ」

この世界はナノテクノロジーが発達し、睾丸ぐらいならカプセル一錠で一〇秒ほどで治せる。

そのため睾丸を持たない女性の中には、まれに彼女らのように玉潰しを非常に軽く感じる者がいた。

ここ、うさぎ県はそういうドＳ女子が世界一多い地域である。

ゲラゲラ笑うドＳ女子の先輩二人に、頬を引きつらせる後輩。

しかし遠めの壮史にはわからなかったが、先輩二人が金的を食らった男の真似をするのを見たとき、彼女は笑いをこらえるので必死だった。

――うわ、護風。そんな技あったんだー。**キ〇タマ潰し、超面白そう！**　でもうちの部に

は男子いないから試せないわ。早く他所の学校と試合したいなー。そんでタ〇キン潰したいわ。この前彼氏に浮気されたばっかりだから玉潰せばスカッとするだろうなー。っていうか彼氏の玉潰したいわ、くそ、別れる前に護風の話聞いてりゃ……いや、今からでも遅くなくね？

「先生も暴漢にあったら護風一択だって言ってたし」

「そうそう、武器がなくてもとにかく玉潰していけば何とでもなるって。**睾丸は女に潰されるためにある**って」

「うわ、先輩それ絶対違いますよ！」

「まあ実際にはエッチ用の臓器なんだけどさ、私らみたいな戦う女？　にしちゃおいしい急所でしかないわよねー。彼氏のんだって「浮気したらやっちゃうぞ」ってちらっと思っちゃうし」

「前に実際潰さなかった？」

「ちょっと平山ちゃんなにいうのよー。そんなわけないでしょ？　三回位よ。**たった六個**」

「えー、そんな、ちょ、マジ？　……ろ、六個って……**そんなに少なかったっけ？**」

　唾をのむ壮史。

　――や、やっぱり女はクソだ。治るからって玉簡単に潰しやがって……臓器だぞ？　臓器。あ、いや、もしかしたら冗談で言ってるだけか？　それにしてもなあ……

　芹沢らの話は多少の誇張はあっても嘘は全くない。六個の話などまるっきり真実だった。

　芹沢らに見つからないように、トイレの出口横の壁に張り付く壮史。

　開いた足の間、男のシンボルは誰かに握りしめられているかのようにギュンギュンに縮みあがっていた。

「そういえば、剣道でも小手で油断すると玉打っちゃうらしいよ」

「そうらしいよね！　男同士なら気を付けるんだって！」

「私らには関係ないよねー。まあ剣道やらないからマジで関係ないけど……」

「小手打ってキャン玉に当たっても、「あーごめんねー（笑）」で終わりっしょ」

「悪いっていったら悪いけど……「おごおっ！」って反応面白過ぎるし！　そんなナイスリアクションかまされたら悪いとか思えなくなっちゃうよ！」

　股間を抑え飛び上がる芹沢に手をたたく平山。

「大体さー、女子ってだけで下に見る奴多すぎでしょ？　武道やってないおとなしい女の子に代わってさ、私らが多少**キ〇タマ磨り潰してやれば**、女を軽く見る男も減るってもんよ」

「そうそう。っていうか二個とも潰れたら男自体減るし」

「ぎゃはは！　男終了ってね！　そんときゃ女子になりゃいいだけだし……女子のほうがおしゃれしたりできるから絶対楽しいよ」

「男子剣道部も**全員タ〇キン抜いて**こっちにくりゃいいのにね」

　ゲラゲラと笑う三人。初めこそ多少遠慮していた後輩ももう遠慮がない。

　やはり女だけの気安さか。

　実際の所玉が潰れようと何をしようと一〇秒で再生するという事実が、自分たちが持たない臓器を軽いものにしていた。

「ま、私だって玉が潰れても治らないなら遠慮するよ？　玉無しはかわいそうだもんね」

「そうそう。私も。でも治るじゃん？　**じゃあよくね？**」

「いいよね。だから**レッツ玉潰し**」
「先輩たち怖ーい、私が男子なら玉縮みあがってますよ」
「もう、根性なしねえ！　近藤くんなら何ともないよ！」
いきなり名前を出され、玉も竿もさらに縮みあがる壮史。
「そうそう。ストイックで冷静で……うちのババアの色目にも全く動じない……いいよね」
「史香なんて「お兄ちゃんと結婚するんです！」とかマジ面で言うぐらいだしね」
「それはまずいでしょう……」
――まだそんなこと言ってるのか……しょうがないな史香は。
しょうがないなで済む年齢なのか微妙だが、ほかの話の衝撃が強いのであまり何とも思わない壮史。
ともかく、裏口から出ようとする。
途中で人の気配を感じ、段ボールの陰に隠れる。
「昨日帰り道で不良に絡まれちゃってさー」
唾をのむ壮史。
嫌な予感がした。
裏口、というよりその横の物置から出てきた少女たち。
段ボールを持ち、五人ほどいる。
「マジ？　薙刀持ってるのに馬鹿じゃね？　もちろん護風で返り討ちでしょ？」
「そうそう！　っていうか相手女の子相手にバット持ってんのよ！　喧嘩の帰りらしいんだけど」
「バットは自前のだけにしとけっての！　肉バットだけにしとけっての！」
「まあそっちはこれだったけど」
小指を立てる少女。
段ボールがいくつか床に落ちる。
「ちょっと、笑いすぎ！」
「いやいや、それは小さすぎでしょ？」
「マジよマジ、いきがってるくせにあっちは小さいのよ！」」
「っていうかなんであんた知ってんのよ？」
「そりゃ護風でタマタマちゃんが潰れてないか見てあげないと危ないでしょ？」
「ナノ薬飲ませりゃ見る必要ないでしょうが」
「それに、掴みかかってきたのに対して膝蹴りで迎撃した奴もいたし」
「っていうか膝蹴りももちろん」
「狙うは**金のタマタマ**。当然でしょ？　こっちは女の子様よ？　一方的にタ〇キン狙える特権階級よ？　急所ぶら下げた「玉・戦士」相手ならね」

「玉・戦士って！」

「で、膝蹴りだけど、ブチっ、と嫌な感触してね。これは見るしかない……アソコ見ようってことじゃないよ？　タマタマを見てあげないとってこと……ほかの部分が偶然見えても、これは不可抗力」

「治療目的なら、写メとかは撮ってないんだ？」

「撮るに決まってるじゃん！　ほら！」

「ぎゃははは！　モロだモロ！」

「やだ、このぐらいなんだ！」

「これは日本人男性の平均値より相当小さいって」

「っていうか顔の写真撮る必要なくね？」

「この子のチンチ〇はこれで一す、って言いたいもん」

「ぎゃはは！　もう完全に治療名目じゃねえ！」

「っていうか全員引きつった笑顔でダブルピースなんだけど」

「別に無理強いしたわけじゃないよ？　**やらないともう一回玉潰し**っていったら、みんな喜んでやってくれた」

「男にとってそれ以上の無理強いないから！」

「写メ送って送って」

「っていうか撮った時点で送れっての」

「ん、全員包茎」

「あ、この子違うよ」

「あ、ほんとだ。先っぽ小さいのに剥けてるわ。見栄剥きっぽいわねえ」

「え、見栄剥き？」

「普段は包茎だけど、脱ぐ前に先っぽをさっと剥きだすんだって」」

「ええ！？　意味不明なんだけど！」

「いや、「ズル剥けですよー、包茎ちゃいまんねん」って示すため」

「示すっていうか偽装だし！　**偽装チ〇ポ**だし！」

「あ、チ〇ポだって！　女の子としてその発言は……」

「フルチンダブルピース写真もらっておいて何言うのよ！」

「男子はいないんだから、ぶっちゃけようじゃん」

「男の七割包茎とかマジなのかな？」

「この写真だと**割合１００％**だけど。この子が**ズル剥け偽装野郎**ならね」

「どうも変だよねえあの話は。だって外国は知らないけど、日本じゃ剥けてる状態の名前ないよね？」

「え？　「ズル剥け」じゃないの？」

「それは名前じゃねーって。一方で包茎は「包茎」でしょ？　七割が包茎ならそっちが普通で名無し、剥けてる方が剥茎？　とか名前付きそうなもんじゃん。少数派が名前付くでしょ？」

「じゃあやっぱり包茎業者の陰謀か……」

「いや包茎業者って」

「包茎手術する業者ね。チョコレート産業がバレンタイン煽ったのと同じ構図」

「嫌な例えねえ」

「って言うか男子剣道部うざいよねえ」

「いきなりね」

「統廃合で向こう潰してくれれば、私らが武道場独占できるのに」

「人数似たようなもんだからねえ」

「近藤先輩、剥けてるかなあ」

「おいおい」

「イケメンは女性ホルモン多いから小さそうじゃね？」

「イケメンなら短小でも許す。短小でも許す」

「オタクとかドＭとか変態野郎はデカい場合が多いらしいよ。デカいんだからマイナスチャラになるかな？」

「なるわけねーだろ」

　結局顔がよくないとダメなのだろうか。

　などと、考える余裕は近藤にはなかった。

「あー、男子の後はくさいわー。汗くせーのは我慢するとして……なんかねえ、変な臭いしない？　雄臭？　なんなんこれ？　キ〇タマの臭い？」

「護風護風」

「キ〇タマあああああ！　とか吠え面かかせたいね」

「ちょ、そのまんま！」

「そんなに痛いのかなあ？　って何度、護風食らわしても今一つ信じられないのよねえ」

「所詮他人事だからねえ……まあだからこそ思いっきり玉潰しに行けるわけだけど」

「違いないわ。ついてないから無茶できる。私ら女子にもぶら下がってたら仕返し怖いし、今みたいにいけないよね」

「っていうかぶら下がってたら女子じゃねーじゃん」

　ゲラゲラ笑いつつ、去っていく女子たち。

　多少は「女子トーク」というものに夢を持っていた壮史だが、わずかな時間にその夢を完全に失いつつあった。

　――なんだよあいつら、玉潰しとチ〇ポの話ばっかり……もっとおしゃれとか、お菓子の話とかしろよ……

　それなら別に男の前でもできるので、あえて「女子トーク」でする必要はないだろう。

　縮みあがった股間を揉みつつ、裏口へ向かう。

　と、背後から絶叫。

「覗きよ！　男子が覗いてる！」

「なっ！？」

　思わず飛び上がる。

　が、壮史の事ではなかった。

　更衣室にいつの間にか忍び込んでいた男が見つかったらしい。

体験版終わり

突如見つかった変態。

壮史の未来を暗示するような玉潰しが始まります。

そのあと、さらに男子剣道部員全員を巻き込んだ女子薙刀部との大乱闘試合、

長物で有利な女子たちは逃げ惑う男子たちの玉を潰しまくります。

実は短小包茎の主人公の短小羞恥ＣＦＮＭ展開も。

続きは製品版でお楽しみください